HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	日本宗教史の構図 ： 新体系日本史『宗教社会史』に寄せて
著者	追塩，千尋; OISHIO, hihiro
引用	北海学園大学人文論集(55)： 1-18
発行日	2013-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

日本宗教史の構図
── 新体系日本史『宗教社会史』に寄せて ──

追　塩　千　尋

はじめに

筆者は先に『新アジア仏教史』日本編（全5巻，2010～2011年，佼成出版社）に見られる日本仏教史の枠組みの特質について，旧『アジア仏教史』日本編（全9巻，1972～1976年，佼成出版社）との比較において論じてみた[(1)]。その際に旧『アジア仏教史』には，編者である笠原一男氏の日本宗教史観が色濃く反映されていることから，関連する笠原氏の他の編著にも必要な限り言及した。そのうちの一書が川崎庸之氏との共編『体系日本史叢書18宗教史』（1964年，山川出版社）であった。

本書は仏教史の枠を広げた宗教史を目指した書であるが，そこには既に転換期宗教史観ともいうべき笠原氏が描く日本宗教史の構図が示されていた。氏が描く構図とは，既成の価値観が揺らぐ時代の転換期には複数の宗教が誕生するというもので，古代から中世にかけての鎌倉新仏教，幕末維新期の新興宗教，敗戦期の新宗教などに注目する。いずれも民衆に分かりやすい教えを示した点など，その民衆性に暗黙の評価価値が置かれていることが特徴といえる。

こうした構図はその後どのように継承され，あるいは変化して今日に至っているのか。この点の検証を，新旧『アジア仏教史』の比較と同様に行う必要があった。ただ，旧体系の新版ともいえる高埜利彦・安田次郎編『新体系日本史15宗教社会史』(2012年3月，山川出版社)は，前稿の最終校正の段階（2012年3月）で刊行されたため，比較検討の作業を行うことはできなかった。

その『宗教社会史』も刊行後1年半を過ぎようとしているので，時期を逸しないためにも本稿では改めて新旧両体系の宗教史の巻を比較しながら，日本宗教史の構図をめぐる課題などについて考えてみたい。したがって，本稿は前稿の姉妹編的位置にあり，前稿同様書評とも紹介ともつかぬ評論風な文章になることを了承いただきたい。

1，新旧の比較

⑴　体系日本史叢書『宗教史』と新体系日本史『宗教社会史』について

本稿では『宗教史』を含む体系日本史叢書を『旧体系』，『宗教社会史』を含む新体系日本史を『新体系』と略すこととし，その中で『宗教史』『宗教社会史』を指すときはそれぞれ『旧』『新』（『』は文中で分かりにくいときに適宜付す）などと記すこととする。

旧体系は1964年の『法制史』を皮切りに，2001年の『思想史』Ⅰをもって全24巻が完結した。旧体系は専門的研究にも耐え得る内容をもった部門別通史で，こうした類書がほとんどなかったことや記述の穏当さもあって広く利用されてきた。今後も利用され続けていく概説書であろうと思われる。ただ，旧体系は一部を除いて分担執筆のため原稿の取りまとめが円滑に進まなかったためか，完結まで40年近くかかったことになる。最終巻の『思想史』Ⅰが刊行されたわずか3カ月後に，新体系の第1巻目（『都市社会史』）が配本されたところに企画遂行にあたっている出版社側の焦りのようなものを感ずる。新シリーズが旧シリーズと併行して刊行されるという異常事態は辛うじて避けられ，出版社は面目を保った形になった。しかしながら，新シリーズが刊行されると旧シリーズは用済み，という印象をもたれてしまうので，こうした時間的に接近した刊行のされ方は少なからず問題を残すと思われる。

そうしたことはともかくとして，新体系（別巻2冊を含め全20巻の予定）はその後1年1冊程の割合で刊行され，2012年3月に9冊目として『宗教社会史』が刊行されたのである。旧体系の宗教史刊行から半世紀程過ぎた

ことになる[2]。両書においてどのような日本宗教史が構想されているのか，ここではまず体裁上のことを中心に比較してみたい。その際に留意しておきたいのは，旧体系と新体系の関係である。

新体系は旧体系の改訂版とは一概にいえないようである。『新アジア仏教史』は旧『アジア仏教史』を多分に意識し，旧が抱えていた課題の克服が目指されていた。しかしながら，新体系では宗教史に限っても旧体系のことが全く触れられていないのである。すなわち，旧体系との関係において新体系の新しさや特質が明瞭ではないのである。正確にいえば，編者によりその点が主張されていないのである。そういう意味では新体系は旧体系とは全く別物で，両者を比較すること自体があまり意味がないことなのかもしれない。書名が宗教史ではなく，宗教社会史であることがそのことを端的に物語っているともいえる。文化史に限っても，新体系では『宗教社会史』を初めとして，他は『教育社会史』『美術社会史』『芸能社会史』などと「社会史」が書名に付されている（旧体系の文化史関係の書名は端的に『科学史』『美術史』『芸能史』『思想史』などであった）。他も『法社会史』『都市社会史』『村落社会史』など，書名に「社会史」が付されたものが目立つ。これは 1970 年代以降の社会史研究の隆盛を反映したものかもしれないし，「社会史」を付すことにより旧体系との差別化をはかることが狙いなのかもしれない。

新体系の文化史関係が未刊であるため，現在のところ旧体系と比較し得るのが宗教史に限られるが，「社会史」が付されたことの意図などについては今後とも注意すべきと思われる。

(2) 新旧の比較

次の表 1 は，新旧の目次のそれぞれの対応部分を対照させたものである。

新体系は 2 部構成になっており，Ⅰ部が時代概観，Ⅱ部が各論（個別研究）である。分量的にはⅡ部がⅠ部の 1.7 倍となっている。こうした 2 部構成は既刊書では『産業社会史』と『都市社会史』で採られているが，それらは『宗教社会史』とは趣が異なっている。概論・各論というスタイル

〈表1〉新旧体系目次比較表

体系日本史叢書『宗教史』	新体系日本史『宗教社会史』
まえがき（笠原一男・川崎庸之） 第1章　原始宗教（長野正） 　第1節　宗教生活の原初形態 　第2節　古墳と原始神道 　第3節　氏神信仰の成立 第2章　奈良仏教 　第1節　仏教の伝来（川崎庸之） 　第2節　教理・教団・六宗兼学などの問題（鶴岡静夫） 　第3節　奈良仏教の受容者たち（同上） 　第4節　奈良仏教と社会（同上） 　第5節　奈良仏教と権力（同上） 　第6節　奈良時代の寺院（同上） 第3章　平安仏教（薗田香融） 　第1節　奈良から平安へ 　第2節　最澄と空海 　第3節　平安仏教の展開 　第4節　平安仏教と民衆生活 第4章　神祇信仰と道教（下出積與） 　第1節　中央貴族層と神祇 　第2節　地方豪族層と神祇 　第3節　農民層と神祇 　第4節　道教流伝の意味 　第5節　神仙思想の展開 　第6節　日本における道教思想の性格 　第7節　道士法の存在形態 第5章　浄土教の成長（田村圓澄） 　第1節　日本浄土教の源流 　第2節　空也と源信 　第3節　浄土教の受容者 　第4節　浄土教と社会 　第5節　二つの浄土教	はじめに（高埜利彦） Ⅰ　時代概観 　1章　日本宗教の形成と社会（曽根正人） 　　1　古代日本宗教史の問題点 　　2　日本宗教の黎明 　　3　古代国家祭祀の創出 　　4　信仰の展開 　　5　古代仏教と古代宗教の成立
第6章　鎌倉仏教 　第1節　鎌倉仏教の誕生(笠原一男) 　第2節　鎌倉仏教の誕生とその発展 　浄土宗(菊地勇次郎),浄土真宗(笠原一男･井上鋭夫)，時宗（大橋俊雄)，臨済宗（玉村竹二)，曹洞宗	2章　中世宗教の成立と社会(平雅行) 　1　古代宗教の中世化 　2　顕密仏教と中世国家 　3　鎌倉仏教の展開 　4　中世社会と宗教 3章　中世宗教の展開と社会（安田次

の発展（今枝愛真），日蓮宗（川添昭二） 第3節　鎌倉室町の旧仏教の動き（田中久夫） 第7章　伊勢神道の成立とキリスト教 第1節　神道説の発達（黒田俊雄） 第2節　伊勢神道の教理（同上） 第3節　中世社会と伊勢神道(同上) 第4節　ヨーロッパ世界との接触とキリスト教の伝来（箭内健次）	郎） 1　室町時代の顕密寺社 2　禅律の活動 3　戦国期の権力と宗教 4　地域の社会と寺社 5　民衆の熱狂
第5節　秀吉の天下統一とキリスト教（同上） 第6節　秀吉の伴天連追放令の公布とその影響（同上） 第8章　幕藩体制の成立と宗教の立場 第1節　仏教（柏原祐泉） 第2節　神道（山本武夫） 第3節　幕藩体制とキリスト教（箭内健次） 第9章　幕末の民衆宗教（村上重良） 第1節　民衆の心理と禁圧 第2節　黒住教の成立と展開 第3節　天理教の成立 第4節　金光教の成立 第5節　法華系在家教団のはじめ 第10章　明治期の宗教 第1節　仏教（村上重良） 第2節　神道（同上） 第3節　教派神道（同上） 第4節　キリスト教（吉田久一）	4章　近世社会と宗教（高埜利彦） 1　織豊政権期の宗教 2　江戸幕府と宗教制度 3　幕藩社会と宗教 コラム　蝦夷三官寺と幕府の宗教政策（谷本晃久） 5章　琉球の宗教（赤嶺政信） 1　琉球の宗教と女性 2　王府の宗教政策 3　外来の宗教 4　おわりに 6章　アイヌの宗教（佐々木利和） 1　イオマンテ，そしてクマ 2　アイヌの宗教儀礼 3　アイヌの世界観
附録　索引・参考文献・宗教系図	付録　索引・参考文献

は，新体系全巻共通のものではないようである。したがって，旧体系と対比し得る部分は第Ⅰ部「時代概観」の部分のみということになるので，その部分を『旧』と対比させた。

なお，『新』のⅠ部の中の第5章の琉球，第6章のアイヌの宗教の部分は『旧』には該当部分がない。内容的にも各論的位置を占めているので，『新』

においては第II部に入れても良いような性格を有した章ともいえる。ただ，『新』ではⅠ部に入れていることや，琉球部分は近世が主になることもあり，便宜的に『旧』の近世部分と対比させておいた。仮にこの2つの章を第II部に加えるなら，『新』における概論部分はさらに細り，全体の三分の一程になる。新旧にはこうした分量上の差異があることを，あらかじめ確認しておきたい。

第II部は各論でありⅠ部の概観編とは性格が異なり『旧』との対比ができないため，時代別に組み替えて表2として別掲した(節は省略)。量的には古代・中世編と近世編に二分されることが知られる。

『新』にはこうした個別研究に関する論考が多く収録されていることや，Ⅰ・II部をとわず注がきちんと付されていることなどの点で，論考のスタイルが『旧』よりも概して論文調である。文章は平易であるし『旧』よりもルビの数を多く付すなどの配慮はされているが，良し悪しは別としても『新』は『旧』よりも概説性が後退している，という感は否めない。

さて，新旧対照表を見てわかるように，新旧の大きな違いの一つは，『旧』が明治期まででではあるが近代まで叙述が及んでいるのに対し，『新』は前近

〈表2〉『新』II部時代別目次

新体系日本史　宗教社会史「II　宗教と社会」時代別目次
古代中世
1章　古代・中世の寺院修造と社会―興福寺を中心に―(安田次郎)
3章　中世の寺社金融（中島圭一）
5章　古代・中世の社会事業と仏教（勝浦令子）
6章　女性と宗教―西大寺叡尊と女性の事例を中心に―(細川涼一)
7章　中世の葬送と墓制（高田陽介）
9章　中世の宗教的アジール（神田千里）
近世
2章　近世の寺社造営―公儀普請と勧化―(杣田善雄)
4章　寺社・御三家名目金と近世社会（三浦俊明）
8章　近世の葬祭と寺院―社会集団論の視点から―(澤博勝)
10章　普化宗廃止と近世のアジールの一特質（保坂裕興）
11章　都市という場の宗教性（榎原雅治）
12章　地域社会と宗教者（西田かほる）

代までとなっていることである。II部の各論も近世までである。編者高埜氏の「はじめに」によると，「日本宗教の特性を解明するためには，既に見えにくくなった前近代を中心にその歴史的な状況を体系的にまとめ」る必要があること（1頁），「（前近代の）宗教の特性は，そのまま継承されたり，水面下に消えたり，あるいは形を変えて存続して」いるため，私たち自身を知り未来を考えるためにもそれらの歴史的解明の意味は大きい（6頁），と叙述を前近代までとしたことの積極的意味を述べている。

編者の趣旨をそのまま受け止めるにしても，概論と各論の量的アンバランスはやはり気になるところである。各論は日本宗教の諸相を様々な角度から描いており，それ自体意義あるものといえる。ただ，本書は日本宗教史の諸相を描く論文集を意図して編纂されたわけではないのであろうから，各論が12本も必要であったかどうかは一考を要しよう。各論を幾本か削るか，削らないまでもコラム化するなどし，余裕が出た分を近現代の概説に当ててもよかったのでとは思う。コラムが一本のみというアンバランスを解消する意味でも，工夫が望まれるところであった。

ここで，『旧』が描く日本宗教史の構図を述べるなら，次のようになろう[3]。まず原始宗教から始まり，奈良・平安・鎌倉は仏教の伝来とその展開，並行して神祇信仰・道教・神道説の形成などが述べられる。戦国期はキリスト教の伝来が注目され，そこで日本宗教を構成する主要三宗教（神道・仏教・キリスト教）が出揃うことになる。江戸期は出揃った三宗教の動向が主として幕府の宗教統制との関係で述べられ，幕末以降は新宗教の成立と国家神道形成下における他宗教の動向が語られる。道教・陰陽道・修験道などが必要に応じて述べられるが，日本宗教における主流とは見なされていない。日本宗教における主流は教義・組織ともに体系性を持った宗教が担うことになり，その中心は仏教である。付録に宗教系図が掲載されているが，そこに体系性をもった宗教を扱うことが『旧』では意図されていたことが知られよう。ちなみに，『新』の付録は索引と参考文献であり，宗教系図は掲載されていない。『新』の叙述を見れば掲載の必要がなかったことが改めて知られる。

以上のことから，『旧』における日本宗教とは仏教を中心として複数宗教が寄せ集められたもので，それぞれの動向・交流などが語られたものといえる。日本人にとって宗教とは何であったのか，そのことが時代によりどのような変化を見せたのか，というような問いは立てられてはいない。

参考までに『旧』の延長上に位置付け得る笠原氏編集による『日本宗教史』Ⅰ・Ⅱ（1977年，山川出版社）の目次を，表3に掲げておく(4)。

『旧』と比較するなら，叙述が大正･昭和にまで及んでいること，女性と仏教，江戸期の地下信仰・民間信仰・修験，などが取り上げられていることを除くと，基本的構図は『旧』と同じで，『旧』を拡大･詳細化した内容

〈表3〉日本宗教史ⅠⅡ目次

笠原一男編『日本宗教史』ⅠⅡ（1977年，山川出版社）目次
はしがき（笠原一男）
序章　日本人と宗教（笠原一男）
第Ⅰ部　原始・古代の社会と宗教
第1章　原始社会の宗教（椙山林継）
第2章　仏教の伝来と奈良仏教の形成（笠原一男，下出積與）
第3章　平安時代の宗教（高木豊，笠原一男，下出積與，大橋俊雄）
第Ⅱ部　中世の社会と宗教
第1章　鎌倉仏教の誕生と古代仏教（笠原一男，高木豊）
第2章　念仏の発展（笠原一男，大橋俊雄）
第3章　禅の発展（今枝愛真）
第4章　題目の発展（高木豊）
第5章　女性と仏教（笠原一男）
第6章　中世の神道と修験（萩原龍夫，宮家準）
第Ⅲ部　近世の社会と宗教
第1章　幕藩体制と宗教（笠原一男，圭室文雄，萩原龍夫）
第2章　体制宗教と地下信仰（長谷川匡俊，大橋俊雄，今枝愛真，高木豊，圭室文雄，小栗純子，大濱徹也）
第3章　近世の民間信仰と修験（宮田登，宮家準）
第Ⅳ部　近現代の社会と宗教
第1章　教派神道の形成と発展（笠原一男，小栗純子）
第2章　キリスト教と現代社会（大濱徹也，森岡清美）
第3章　国家神道の形成と発展（森岡清美）
第4章　仏教と現代社会（池田英俊）
第5章　新宗教の誕生と発展（藤井正雄）
第6章　現代の既成宗教（藤井正雄）

といえる。なお，本書の英訳版が 2001 年に刊行されたが（佼成出版社），英訳版を出したことの意味などはその書には記載されていない。推測になるが，網羅的な叙述がなされていることや，他に適当な類書がないなどのことから，本書が日本宗教史の概説書として当時を代表する書である，という自負があったものと思われる。

『旧』及び『日本宗教史』ⅠⅡに見られる日本宗教史の構図は，高校教科書などの日本史概説における宗教の扱いと類似の体をなしている。すなわち，古代・中世は仏教の展開，戦国期にキリスト教が伝来するところで，文化における仏教を中心とした宗教の役割が終了するような観を与える。近世は幕府による宗教統制の様相が主となり，幕末の新興宗教や近代の国家神道などが語られはするが，それまで中心に語られてきた仏教ほどのインパクトは感ぜられない。端的にいうなら，古代・中世は仏教を中心とした宗教の時代であったが，近世以降現世主義的傾向が強くなることとも相俟って社会における宗教の意味が後退するため叙述に力が入れられない，ということであろうか。それは鎌倉新仏教をピークとして以後仏教は俗化・形式化・堕落化の道を歩むことになる，という伝統的仏教史観に裏付けられた認識ともいえよう。さらに，室町以降は禅宗文化などが語られはするが，芸術性豊かな宗教芸術品がなくなる，という根拠薄弱な前提に基づいたと思われる価値観も多分に反映しているのであろう。

以上の点で，一般的な日本宗教通史においては，日本仏教史＝日本宗教史という構図が基本であるといえよう。つまり日本宗教の動向は仏教の動向に左右されている，という構図である。『旧』の叙述の分量を見るなら，鎌倉仏教を中心とした仏教の記述が多いこともあり古代・中世と近世・近代の割合は約３：１となる。『日本宗教史』はその点で時代毎の分量のバランスは配慮されているが，古代・中世と近世・近現代が１：１というのは，通常の日本史概説では１：３位になることを鑑みるなら，古代・中世の比重の高さが知られよう。

以上の体裁上の比較を踏まえたうえで，『新』の特質について次章で検討してみたい。

2，『新』の特質と課題

(1)　内容の概観

Ⅰは時代の概観で，近世までの宗教が述べられる。Ⅰの1は，原始から平安初期が扱われる。古代日本の宗教を把握するにはまず東アジア諸地域との関係から始めるべきとし，随所に中国の影響（あるいは模倣）の様相が語られる。また，具体的かつ歴史的に裏付けられた宗教史は天武朝から始まるとし，その時期に「カミ」祭祀の全国的組織・編成と仏教の本格的整備がなされたとする。そして，10世紀の仏教信仰が日本仏教・日本宗教信仰の祖型であり，その最初の展開が浄土信仰であるとする。

Ⅰの2は1を受けて10世紀が中世仏教への転機とし，その理由が述べられた後，顕密体制論の立場から鎌倉時代までの宗教の様相が仏教中心に述べられる。鎌倉仏教はそれまでの新仏教中心の叙述とは異なり，従来旧仏教の復興と呼ばれた禅律僧による仏教改革の様相が叙述の中心に置かれている。そしていわゆる新仏教は異端思想とされ，それらは支配の道具となった顕密仏教への怒りの中から登場したものと位置付けられる。特に顕密寺院の意義を論ずる中で，中世は技術と呪術が未分離の宗教の時代であることに注意を喚起する。

Ⅰの3は室町・戦国期が扱われる。この時期は依然として顕密寺社が大きな存在であること，西大寺流を中心とした律は15世紀末にも生命力がなくなってはいないこと，戦国期の一向一揆は必ずしも反体制・反権力的なものではなかったこと，などの指摘が目を引く。そして，民衆の宗教的活動が盛んになることを注目し，その事例として開帳，逆修，抜け参り，巡礼，納骨，盆・風流（含盆踊り）・一揆などのことが述べられる。

Ⅰの4は江戸期が扱われる。まず，信長・秀吉・家康らによる宗教統制策が述べられるが，朝廷の祈禱・宗教行為（神事）や神道・陰陽道の制度と統制に関わることに触れられている点が目新しい。さらに地域社会における寺院・堂・神社の再興・新設の様子，村人の寺社への関わり，寺，神社以外の宗教者として山伏，陰陽師，万歳，盲僧，歩き巫女，猿引，座頭，

瞽女，御師などの諸相，富士講，御嶽講などの新たな信仰，平田篤胤，神葬祭運動などに見られる新たな死生観，など諸宗教の様々な動向が盛りだくさんに述べられる。

蝦夷三官寺を扱ったコラムは，Ｉの４を補うと共に，次の琉球・アイヌの宗教と併せて，政権所在地を中心とした宗教の展開に叙述が傾きがちな傾向を是正し，宗教の地域的展開の諸相の一面を明らかにしたものとして注目される。蝦夷三官寺は近世国家それ自身により全く新規に建立された寺院であり，蝦夷地（厳密には道南は除く）は和人による既成教団組織が皆無であったため，より直接的な形で幕府の宗教政策が及んだため，幕府により期待された仏教寺院の役割を考えることにもつながる，という重要な視点が提起されている。コラムという制約はあるが，近世において宗教とは何であったのかという高埜稿では必ずしも十分伝わってこない視点を補うものである。

Ｉの５は1609年の薩摩侵攻以前の古琉球期から1879年の琉球処分に至る近世琉球期の宗教について，国家体制との関わりを中心に叙述したものである。17世紀後半〜18世紀初中期はノロ，ツカサと呼ばれる神女･女官らの勢力が低滅した一つの転換期であること，その時期に儒教イデオロギーが導入され祖先祭祀の習俗が成立すること，古琉球期に伝来した仏教は神女組織と併存して展開していく様相が述べられる。

Ｉの６は来訪したカムイ（神）である熊を神の国に返す儀礼であるイオマンテ（熊送り）に対する和人の無理解さが繰り返し主張され，改めてカムイやアイヌの世界観が述べられる。本稿は時代的変遷が不明瞭でかつ文字を持たないアイヌの宗教をどう描くか，という難問への一つの答えでもある。

以上が概説編の概要である。IIは「はじめに」によると，日本宗教の特性解明に不可欠な課題を扱った個別研究で，テーマ設定は現代との関連の中で問題を探ったとする。宗教史の中の部門別通史の試みがなされたもの，という受け止め方もできよう。ここでは個々を順番に紹介するのではなく，「はじめに」を参考にして設定されたモチーフと該当論考の紹介，という取

り上げ方をしたい。

①前近代の寺社修造の具体的事例を通して寺社と社会・権力との関係を明示したもの。IIの1と2が該当し，1は古代･中世における興福寺造営･修造の実態が社会経済史的アプローチにより述べられ，2は近世寺社造営の最盛期を元禄期とし，その時期に行われた助成（公儀普請）の代表北野天満宮と自力（勧化）の代表東大寺の造営過程を通じて，勧化の実効性が失われて行く様相が述べられる。

②金融と信用に関して機能した仏教の権威について。IIの3と4が該当する。3は中世における寺社金融の経済的位置付けと，貸し出された銭は仏威・神威を帯びていたことを通じて中世人の神仏・寺社への観念（心性）の一端に迫る。4は寺社名目金金融の領主金融としての側面や多様な資金需要者の存在形態などについて，宮家・摂家門跡寺院，御三家の名目金貨仕付けの事例なども加えて総合的把握を目指したものである。

③宗教の持つホスピタリティ（救済機能）について。IIの5が仏教を中心とした古代中世の社会事業について扱い，救済活動の多くは菩薩信仰に支えられた個別の活動僧の努力の積み重ねに負うことが多く，その点で継続性などに限界があったことが指摘される。

④女性と宗教については，IIの6で西大寺叡尊を素材に，一人の宗教的個性の形成に際して多くの女性が関わっていた様が述べられる。

⑤前近代の葬送について。IIの7と8が該当する。7は圭室諦成以後の葬送儀礼の研究について，中世においては種々の葬送の具体相を明らかにする研究が進展しているとし，その成果について紹介している。8は従来の近世葬送儀礼研究は法制度と民俗学的研究が主であったことを鑑み，社会関係と社会構造を踏まえて民衆葬儀と仏教教団の関わりを明らかにする研究方法により，近世仏教の積極的意味を見いだそうとする。

⑥寺院のアジール性について。IIの9・10が該当する。9は中世ばかりでなく近世を見通した研究で,法的次元ではアジールは近世に衰退するが,寺檀関係を見るなら運用実態では近世にも一定程度一般性をもっていたとする。そして「場」としてのアジールばかりではなく，僧侶による助命嘆

願，救解行動などといった「人」のアジールの考察の必要性を説く。10 は幕末維新期にかけて普化宗が停止・廃止される過程を通じて，アジールを成り立たせた普化宗の活動・機能・要素を照射し，近世日本におけるアジールの一特質を浮かび上がらせようとする。ここでは普化宗を特異宗教と見なしがちな傾向が戒められている。従来の宗派を中心とした宗教史においてきちんと光が当てられていなかったといえる普化宗が取り上げられた点は,『新』が描こうとする宗教史の構図の特質をよく示しているといえよう。

⑦人間の集う市場などと宗教施設との関連性，そうした場における宗教者（芸能者）との関わりの諸相に関するもの。II の 11 と 12 が該当する。11 は中世の商人（連雀商人や香具師など）・都市と修験者との関わりを紹介し，都市を商業の場として成り立たせるために宗教性が必要とされた理由などを旦過の分析などを通じて考察する。12 は近世における廻村の宗教者の存在形態について，「笠之者（かさのもの）」「筰」を例に考察し，彼らの活動を支えていた要件は交通の拠点という場であったことを重視する。

⑵ 『新』の特質と課題

以上の『新』の概観を踏まえたうえで，『新』の特質について改めて考えてみたい。その前に今一度『旧』の特質を確認しておきたい。『旧』の「まえがき」には狙いとして，①「時代の転換期ごとに新しい宗教が求められ，その求めに応えて新しい宗教が生まれた」理由と，②「それぞれの宗教がそれぞれの時代において，社会と政治にたいしてどのような姿勢をとってきたか」の諸相，を明らかにすることとされる（1～2 頁）。①には編者笠原氏の転換期宗教史観ともいうべき構想が色濃く示されていることが知られる。そのことに関しては前稿でも述べたことなので，ここでは繰り返さない。

留意したいのは②の「それぞれの宗教が…」という部分である。ここに日本宗教を描くには個別宗教の動向の寄せ集めとなる，という方法論に関わる方向性が明瞭に看取されよう。確かに日本宗教を分解すれば複数の宗教に分かれることになる。しかし，宗教間の互いの交渉などが描かれたと

しても，それが即日本宗教を語ることになるのであろうか，という問題は残ろう。これは日本宗教史を描く際の恒常的課題であり，実際の取り組みは難しいことである。その辺を『新』はどのように克服しようとしているのであろうか。

以上の観点から『新』の「はしがき」に改めて注目するなら，「日本の宗教について考えるということは，日本の歴史全体を考えることに近い」とし，そのために具体的には「宗教と権力との関係，信仰をささえる社会の問題，寺院・神社や宗教者たちのさまざまな活動」を検討することを目標に掲げている(6頁)。言い換えるなら，日本あるいは日本人にとって宗教とは何であったのか，という『旧』には欠けていたといえる課題を解決しようとする方向性が目指されているのである。そのためには宗教史を単に文化史の一分野とはしない，ということになろう。その意図を実現するために書名を『宗教社会史』としたものと思われる。教義・哲学について検討できなかったことを課題としているが(6頁)，狭義の文化史に属する部分にウエイトを置くと従来型の宗教史になる恐れがあるため，そうならないように宗教の社会的役割部分にウエイトを置いたともいえよう。

ただ，新旧ともに「宗教」の定義めいたことには言及していない。叙述の狙いを明確にするためは，賛否は別としても「宗教」の定義は示して置くべきであったと思われる。

さて，『新』において，日本あるいは日本人にとって宗教とは何であったのか，という視点を各執筆者がどこまで共有していたのかは定かではない。しかしながら，そうした観点から各論考を見るなら示唆的であったのが，Ⅰにおいては2及びコラムで，Ⅱにおいては3・4・9・11などの諸論考であった。そこでは個々の宗教の特性が前面に語られず，社会あるいは国家さらに民衆にとってどうであったのか，という視点から論ぜられている点で共通している。その中でも近世関係の論考が目立つのが特徴といえる。仏教中心に日本宗教が語れてきたこれまでの経緯を考慮するなら，近世仏教堕落論の評価から中々抜け切れない中で，これらの論考は近世宗教に積極的評価を与えることに寄与することになることが期待される。近世宗教

の意義付けが明確にされることにより，古代・中世に比重が置かれていたこれまでの宗教史観の克服が一定程度なされた，といえよう。その点Ⅰの４において，信長・秀吉・家康らの宗教政策を述べる中で，彼らが宗教を必要とした理由などにもう少し積極的に言及して欲しかったと思う。

近世が評価されていることや諸宗教の寄せ集め風な記述になっていないことに『新』の特色を見いだせるが，結果として仏教中心になっており，キリスト教や新興宗教，陰陽道，道教などの記述が乏しくなっている。

仏教が中心となることはこれまでの研究の経緯からしてある程度はやむを得ないことと思われるが，そうであれば中心となる（ならざるを得ない）理由を述べるべきであろう。この点で『新』ではⅠの１で，仏教を中心とした叙述にならざるを得ない理由として，日本宗教は仏教により信仰・宗教を語る言語や論理を獲得したこと（６～７頁），他に伝来した道教･陰陽道などは習俗次元の影響しか残していないこと（10 頁）などが上げられている。仏教のこうした影響力がいつまで継続されていくのか，という連続面・断絶面に関わる課題意識を他の章は共有すべきであったと思われる。

仏教が中心となるとはいえ，神道・キリスト教・陰陽道・道教・修験道などの諸宗教（幕末以降は新宗教が加わるが）を一つの融合体として把握して日本宗教史を描くことは可能なのであろうか。『新』は宗教の社会的機能に焦点を合わせることにより，もろもろの宗教を一つの地平に置いて論ずることを可能とした。教義・哲学に及んでいたらやはり諸宗教の寄せ集め的なスタイルになったかもしれない。

寄せ集め的な宗教史のスタイルを克服する可能性を有している方法論の一つが，『新』でもベースとされているといってよい顕密体制論であるのかもしれない。黒田俊雄氏は顕密体制について定義めいたことを繰り返し述べたが，次の定義が比較的明解である[5]。

> 中世仏教の主座に正統的な位置を占め宗教の次元でひとびとを支配していたのは，いわゆる旧仏教，つまり天台・真言・南都の諸宗であり，その諸宗を裏づける原理は，顕教と密教の同一と差別を論じつつ諸宗派・諸寺社・諸門流がそれぞれの特色を競う〝顕密主義〟であった。

「顕密」という論理主義と直観主義を巧妙に組み合わせた思考方法が主軸になり，仏教諸宗のみならず神祇崇拝・陰陽道なども内部にとりこまれ，政治権力（王法）と宗教（仏法）の関係もそれによって規定されていた。聖や新仏教は，その構造が生み出した周縁的な存在であった。私はこのような仏教の体制を「顕密体制」と呼ぶ。（傍線は筆者）

傍線部にうかがえるように，顕密体制論は諸宗教を融合的に把握し得る理論であった。そして，氏によると顕密体制は10世紀末期にその特徴をみせはじめ中世末期に歴史的使命を失うものの，その影響は近世・近代の思想史にも刻印されているとする(6)。全時代とはいえないまでも，日本歴史全体に適用し得る理論でもあるようなのである。この理論・枠組みに沿って具現化の試みが積み重ねられたなら，総合的な日本宗教史を描いたモデル型が示されていたかもしれない。

しかし，黒田氏自身がそうであったように，その後顕密体制論は寺社勢力論という方向で研究が活発化し，今日に至っている。寺社勢力とはいっても，当初は寺院史研究が先行し実質寺院勢力論の様相を呈し，「社」は寺院に付随的に述べられ神社の独自性などの追究は遅れていた。ただ，近年神社・神祇史研究が活況を呈しており，寺院に偏重していた傾向が是正されつつある。

しかしながら，上記の引用部分にも明瞭に述べられているが，顕密体制は「仏教の体制」とされている。諸宗教を包括し得る視点を提供しながら，そうした方向に進まなかったのは，顕密体制論は常に仏教の問題に収斂していく構造を有していた理論であることが一因と思われる。諸宗教それぞれの特色が配慮されてはいても，その特色が仏教に還元されてしまいかねない危うさを内包した理論といえるのである(7)。

顕密体制論が有していた総合的な日本宗教史を描く可能性は今日においてまだ具体化されておらず，残された課題である。それは『新』においても課題として残されているといえよう。仏教に偏せず，特定の時代の宗教のあり方を価値付けせず，宗教の存在形態を総合的に構築する試みはまだこれからといえよう(8)。

おわりに

以上，『新』を素材に，日本宗教史の構図をめぐる問題について覚書風に記してみた。『新』の個々の論考についてコメントや注文したいことはまだ残されている。筆者の関心からいうなら，IIの5は中世部分が物足りないし，仏教のみならずキリスト教の慈善救済にも触れて欲しかった。また，神官はなぜ社会事業を行わないのかという問いを立て，宗教と救済の問題を立体的に描いてみる試みも有効ではないか，といった感想も持った。ただ，本稿は宗教史の構図に関することを論ずるのが主題なので，個々の問題には立ち入らないこととしたことを了承されたい。

『新』は宗教の社会的機能を描いたものであるので，教義・哲学を初めとする諸要素について網羅的に記されている訳ではない。個々の宗教に関する説明が少ないのが『新』の特徴ともいえる。その点では，『旧』や『日本宗教史』の意義が失われた訳ではない。それらには『新』を補完する内容が含まれているからである。特に教育現場ではまだ『旧』『日本宗教史』が示した枠組みに基づいた教科書が使用されているので，『旧』『日本宗教史』の方が教科書を補う参考書としては使用しやすいはずである。例えば，浄土教やキリスト教などに関するまとまった知識が必要となった場合，『新』よりも『旧』などに依拠しなければならないであろう。

新体系の刊行により旧体系の役割が終了するのかどうか。こと宗教史に関しては必ずしもそうとはいえないことを述べて結びとしたい。

注

(1) 拙稿「日本仏教通史の枠組み ――『新アジア仏教史』日本編刊行に寄せて――」（北海学園大学『人文論集』51，2012年3月）。

(2) 『宗教社会史』は18人による分担執筆であるが，そのうち3人が脱稿あるいは入稿の年月を入れている。そのうち，もっとも早いのが2000年である。刊行の12年前に既に原稿の一部が完成していた訳である。分担執筆の書にお

いて，原稿提出の足並みをそろえることの難しさが知られる。それとともに，旧体系の大部分が1970年代半ばまでに刊行されていることからしても，新体系は遅くとも1990年代初頭には企画が進められていたことが推察される。

(3)　『旧』に対する書評は大野達之助氏によりなされている（『日本歴史』212，1966年1月）。

(4)　本書に対する書評は宇佐美正利・新城敏男・船岡誠・孝本貢氏らによりなされている（『日本宗教史研究年報』 2，1979年4月）。

(5)　黒田俊雄「顕密体制 ── 中世史の一つの見直し ──」（初出は1981年，黒田俊雄著作集第2巻所収，1994年，法蔵館）。

(6)　同氏「顕密体制論の立場 ── 中世思想史研究の一視点 ──」（初出は1977年，注(5)の著作集所収）。

(7)　同氏著『日本中世の社会と宗教』（1990年，岩波書店）の序説「顕密体制論と日本宗教史論」も，宗教史というよりも実質は仏教史の課題が述べられている。

(8)　この点で末木文美士『日本宗教史』（2006年，岩波新書）は，新書版ながら丸山真男氏が日本古来からの伝統的思惟様式として設定した古層論を批判的に継承しながら，思想史の立場からではあるが日本宗教史の総合的通観を試みた意欲的な書である。

〈付記〉

本稿は2013年度北海学園大学学術助成金（総合研究，代表　安酸敏眞）による研究成果の一部である。